

企業情報

ソーラーフロンティア株式会社

所在地 / 本社：東京都港区台場 2-3-2
東北工場：黒川郡大衡村松の平 2-21
TEL 022-745-8000
FAX 022-745-8008
http://www.solar-frontier.com/jpn/



代表取締役社長 / 平野 敦彦
資本金 / 351 億 2,073 万円
設立 / 2006 年 8 月
従業員数 / 99 人 (東北工場：2016 年 6 月現在)
事業領域 / CIS 薄膜太陽電池の研究開発・生産・販売並びに同製品を使った発電システムの販売、発電所プロジェクトの開発・遂行、発電事業の運営・保守サービス
企業理念 / 優れた技術探求とその応用により、太陽光発電システムを世界中に普及させ、豊かな生活を実現するとともに、持続的成長が可能な社会づくりに貢献する。

「一度でいいから最後まで製品づくりに関わりたい。そして、自信を持って完成品

働く父親の背中にあこがれて ものづくりの道へ歩み出す

木村さんが、ものづくりに興味を持ったのは、工場を30年間働いていた父親の影響が大きかった。

子どもの頃、父親に連れられ参加した職場の行事。木村さんは、そこで見た工場の雰囲気や、大人たちの姿に、「カッコいいな」とあこがれを抱いたという。そして、高校を卒業後、県内にある半導体や建材の製造工場に働いてきた。

就職してからの13年間、木村さんが作ってきたのは、製品の一部分だった。

最新の技術で生み出される
メイド・イン・東北の太陽電池

木村さんは、2015年4月に稼働したばかりの東北工場で、製造ラインの管理と製品の品質チェックを行っている。

「東北工場では、最新技術と新しいプロセスによって太陽電池が生産されています。ほかにはない、最新のものづくりに携わることができる、とてもやりがいのある仕事です」と木村さんは話した。

ソーラーフロンティア株式会社では、独自の研究開発によって誕生した新しいタイプの太陽電池を製造している。

太陽電池に使われる半導体は、シリコン

結晶を材料とするものが主流だが、同社が開発した太陽電池には、金属化合物が使われている。主に銅(Cu)、インジウム(Iu)、セレン(Se)などの元素から構成されるため、これらの頭文字をとって「CIS太陽電池」と呼ばれる。

実際の設置環境下で高い発電性能を誇るCIS太陽電池は、電池の薄型化、資源の節約による低コスト化を可能にした。さらに東北工場では、徹底したプロセスの自動化を進めることで、さらなる効率化によるコストダウンが図られているという。

「この東北の地で確立した最先端技術をもって世界に挑んでいます」と木村さんは胸を張る。

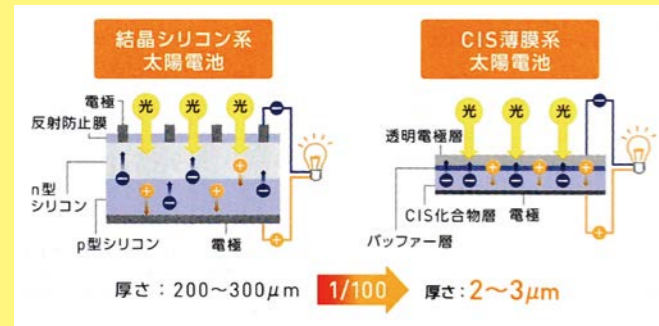


生産現場をつくる幸せかみしめ
目指すのは世界一の工場

広い工場内を巡回する木村哲也さん。同僚と無線機を使って連絡を取り合う

先進技術から生まれた「CIS 太陽電池」

省資源、そしてカドミウムフリー



結晶シリコン系太陽電池の厚さが約200～300 μm であるのに対し、CIS太陽電池はその約100分の1にあたる約2～3 μm 。原材料の使用量が少ないため、省資源です。また、毒性の高いカドミウムや鉛を使用していないため、環境にも優しい太陽電池です。



シンプルな製造工程で、省エネを実現

CIS 太陽電池は、結晶シリコン系太陽電池とは異なる技術で作られており、製造工程がシンプル。製造時に使うエネルギーが少ない点も特長です。

CIS 太陽電池の製造工程



仕事 01

独自の技術と高い性能で世界に挑む 東北産の太陽電池を製造

生産管理
木村 哲也さん (34 歳)
ソーラーフロンティア株式会社 東北工場 (大衡村)

自動化された工場
製造過程の進行に目を配る

1枚のガラス製の基板が、ロボットアームによって、大型の装置の中へ順番に送られていく。ガラス基板上に、金属膜や光吸収層の形成といった、いくつかのプロセス(工程)が施されるたび、表面に新たな層が形成され、しだいに太陽電池としての機能が備わっていく。

「東北工場ではプロセスの自動化がかなり進んでいます。ですから、こうして広い工場内を歩いていると、働く人の姿をあまり見かけません」

こう説明するのは、製造グループで働く木村哲也さん。工場内を見回りながら、自分の担当する製造装置が、正常に動いているかどうかを確認していた。装置のモニターを指さし、表示されるパラメーターを一つ一つ確認していく。その表情は、真剣そのものだ。

「ちょっととした数値の変化でも、後に異常につながる可能性があります。それを見逃さないようにラインを管理するのが私たちの仕事。少人数の現場ですので、チームワークがとても重要なんです」

その時、木村さんの無線機に、同僚から SOS の要請が入った。

「すみません。ちょっと行ってきます」

木村さんはそう言うのと、急いで現場へと向かった。



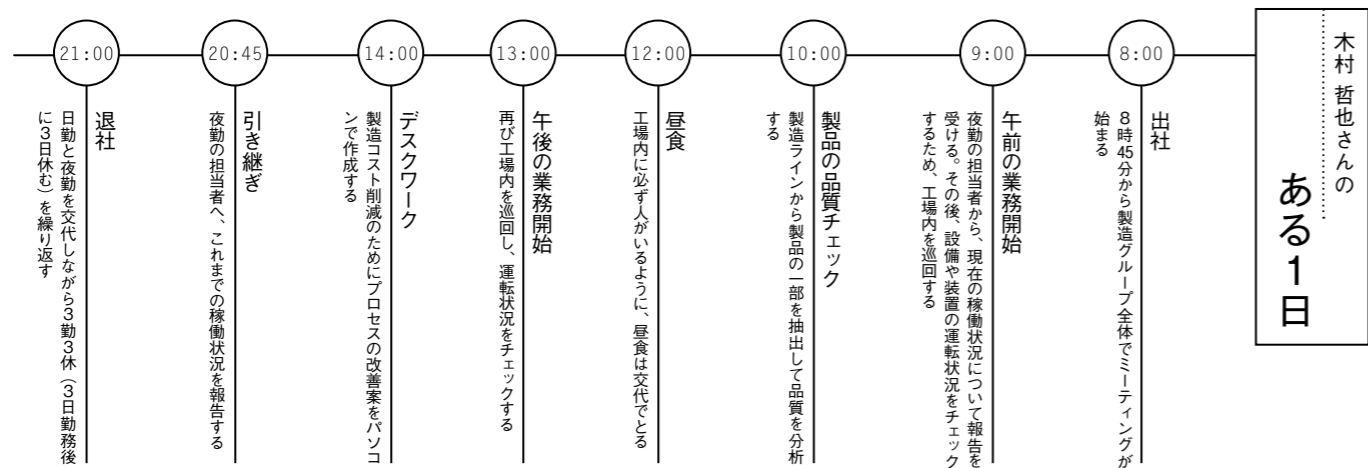
パソコンを使って、プロセスの改善案の資料を作成。改善案は、月1回の全体会議で検討される



同じチームのスタッフから、状況の報告を受ける。少数で働く現場は、情報の共有とチームワークが重要だ



装置の液晶モニターに表示されているパラメーターを確認し、運転状況をチェックする



広い工場内において、連絡用の無線機は必須アイテムだ



分析結果の報告を受ける。検出した値にエラーがあった場合、電池の品質にどんな影響を及ぼすのか、どのプロセスを改善すれば解決するのかについて検討する



製品の品質を分析するため、任意に抽出した製品を分析器に合うサイズにカットする。不良品を出さないために、分析作業は大切な業務の一つだ

上司に聞く



東北工場 製造グループ課長
桑畑 浩志さん

リーダーシップとメリハリある指導でチームを牽引して欲しい

東北工場では、最高品質の太陽電池を量産するため、スタッフが力を合わせて体制づくりを進めているところだ。

年齢的に中堅にあたる彼は、製造ラインはもちろん、チーム内もうまくコントロールしてくれています。「報・連・相」を常に意識して、リーダーシップをもってチームのバランスを取ることができる人物。全面的プロジェクトリーダーを経験したことで、彼の良い部分が十分に発揮されたのではないかと感じています。

今後もしリーダーとして、さらに上を目指せる人材だと期待しています。そのためには、厳しく指導するところとほめて伸ばすところのメリハリをつけて、後輩にあたってほしいですね。

を見届けた」という気持ちだが、日増しに強くなっていった。

「そんな時、地元で完成する太陽電池の製造工場を募集していることを知り、応募したんです」と木村さんは、入社した経緯を語った。

工場で長く働いていたとはいえ、太陽電池の製造は初めてだった。木村さんは、研修先の宮崎県の工場で、プロセスや電池の知識を必死に頭に叩き込み、東北工場働き始めてからも、時間を見つけては専門誌や社内資料に目を通し、最新の技術を学んできたという。

「製品について知らないままでは、作ることはできない。そんな無責任なことは許されない!」。これまでの経験で木村さんが培ってきた、ものづくりに対する姿勢が、自らの成長を後押しした。

より良い製品を作るためにプロセスの改善に努める

東北工場に移って1年目、木村さんは、上司から生産体制の安全面を改善するリーダーを任された。きっかけは、工場内の階段で足をくじいてケガをしてしまったことだった。

「同僚には、同じような経験をさせてはならない」。木村さんは、念入りに工場や装置を見て回りながら、徹底して改善点を洗い出したという。

現在は製造ラインの効率化を図るリーダーとして、製品のコストダウンの一翼を担っている。最近でも、木村さんの改善案が承認され、20分の作業時間の短縮につながった。

「これで、仲間の作業の負担が軽減され、製品の品質向上につながるはずです」と木村さんは目を細めた。

東北工場が稼働して2年目を迎え、ついに、6月から商業生産を開始した。さら地から建物ができ、次々と装置が備え付けられていく。そして、製造ラインを動かしながらプロセスのテストを繰り返す。製品だけでなく、工場そのものを最初から作り上げていくプロジェクトに携わることができたのは、とても幸せなことだと木村さんは思っている。

「この工場が開発された生産技術は、CIS太陽電池を製造する手本として、今後世界中に広がっていくと確信しています。それが、生まれ育った宮城県から発信されることは、とてもうれしいことです。世界ナンバー1を目指す工場で働く姿を、自分の子どもたちにも見せていきたいです」かつて、ものづくりの世界へと導いてくれた父親の姿を自分に重ね合わせながら、木村さんは内に秘めた情熱について静かに語った。

未来のACEへ先輩からのアドバイス



社会に出て仕事をすると、必ず何らかの壁に直面するでしょう。そういうピンチは、自分で解決策を見つかったり、人に相談しアドバイスをもらったりすることができるとチャンスだと思っています。

私自身も失敗や悩みが、後の成功につながったということがたくさんありました。

例えば、生まれて初めて勤務中にケガをしてしまい、落ち込んだことがありました。そんな時に上司から、「この経験を次にどう生かしたらいいのか、考えなさい」とアドバイスをいただき、プロジェクトリーダーとして奮起することができました。

将来どんな仕事に就いたとしても、みなさんには、チャレンジ精神を持って、何事にも前向きに取り組んでほしいと思います。



大衡村にある東北工場。同社が開発した最新の量産技術が導入され、世界トップクラスの低コスト化を実現している。今後、同社が海外生産を展開するためのモデル拠点としての役割も担っている

仕事図鑑 CASE 01

独自の技術と高い性能で世界に挑む東北産の太陽電池を製造

生産管理
木村 哲也さん (34歳)
ソーラーフロンティア株式会社 東北工場 (大衡村)

仕事 図鑑 CASE 02 

高度な溶接技術を武器に 電力の安定供給を支える

溶接士 三浦 広太さん (25歳)

東北発電工業株式会社 利府製作工場 (利府町)

安全に正確な溶接を遂行するため 実践しながらの訓練を繰り返す

朝から雨が降り続くある日、東北発電工業株式会社の利府製作工場で、水冷壁管のサンプルと向き合う三浦広太さんの姿があった。

水冷壁管とは、ボイラーの周囲を垂直に取り囲む無数の管のこと。火力発電では、水冷壁管を通る水が、ボイラーの熱によって水蒸気となり、発電機のタービンを回すことで電気が生み出される。

「水冷壁管の定期点検では、管の一部を切り取って、腐食や劣化の進行について調べます。切り取られた部分に、新しい管を溶接して復元するのが、次の現場で行う仕事です」と三浦さんは説明した。

東北発電工業は、高度な溶接技術を武器に、発電所や工場などエネルギー関連施設の建設やメンテナンスを行っている。ボイラーやタービンといった発電設備の心臓部ともいえる部分を取り扱うことが多いため、作業の不具合が、施設そのものの停止につながりかねない。そこで、三浦さんたち溶接士は、作業現場に向かう数日前から、工場で現場を想定した訓練を行うのだという。

「溶接する場所ごとに素材が大きく異なります。無理な体勢で作業をしなければなりません。無理な体勢で作業をしなければならぬこともあります。どうすれば、安全に正確な溶接ができるのか、何度もシミュレーションして、作業のイメージを膨らませていくんです」



訓練と経験を積み重ね 理想の溶接の形を追求する

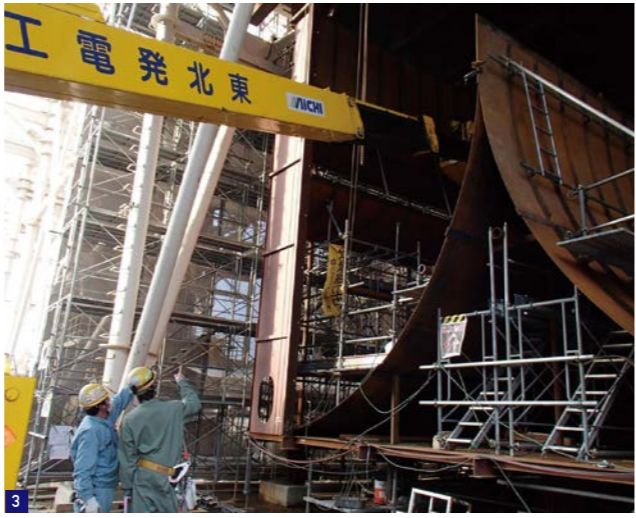
「技術者のオリンピック」の出場を夢見て 高度溶接の世界へ踏み出す

三浦さんは、高校の機械技術科で機械加工や材料加工について学ぶ中で、電気溶接に興味を持つようになった。在学中、同社に就職していた先輩から技能五輪の話聞き、「技術の世界にも、オリンピックのような世界大会があるんだ。いつか挑戦して自分の腕を試してみたい」と思い溶接の世界へ飛び込んだ。

「高校で溶接を学んでいた時には、旋盤やフライス盤のような精度を求められる作業だと感じていた」と話す三浦さん。しかし、就職して本格的に溶接技術を学び始めると、ミリ単位の仕上がりが求められることを知り、衝撃を受けたという。考えの甘さを反省した三浦さんは、とにかく練習に励んだ。

同時に、目標だった技能五輪へ出場するため、課題練習にも打ち込んだ。入社4年目に、3回目の挑戦で全国大会への出場を果たしたが、満足のいく成績ではなかった。「全国大会に出られる喜びよりも、会社の代表であるというプレッシャーの方が大きかった。緊張で頭の中が真っ白になり、力を発揮することができませんでした」

リベンジに燃える三浦さんは、翌年も全国大会へ出場し、これまで同社が送り出した選手の中で2番目の好成績を収めることができた。技能五輪の成績が高校の恩師の耳にも届き、母校で開催した「技能五輪実



演見学会」に招かれた三浦さん。後輩の前で技を披露する自分が誇らしく思えた。

打ち砕かれた自信 現場作業の厳しさを痛感する

5年間の教育期間を経て、現場デビューを果たした三浦さんであったが、すぐに現場の洗礼を受けることとなる。

ある発電所で三浦さんは、密集する管の裏側を、鏡を見ながら溶接する作業を担当した。溶接する部分を目視で確認できないうえ、配管の下に潜り込んで作業を行わなければならない困難な場所もあったという。高度な技術が必要だが、工場で何度も訓練を重ねていたこともあり、自信はあった。

- 1 火力発電所の水冷壁管の溶接作業を想定したシミュレーションを行う三浦広太さん。定期点検のために切断された管を溶接して復旧する作業が、三浦さんの次のミッションだ
- 2 溶接する水冷壁管の隙間の幅が均等かどうか、ゲージを使って確かめる
- 3 東北電力原町火力発電所(福島県南相馬市) 2号機の震災復旧工事の様子。煙道ダクトを補修する
- 4 東北電力新郷発電所(福島県喜多方市) 4号機の水車発電機分解点検組立工事の様子。発電機回転子を吊り出す
- 5 東北電力女川原子力発電所(女川町) 循環水ポンプモーター点検の様子

企業情報

東北発電工業株式会社

所在地 / 本社：仙台市青葉区大町 2-15-29
TEL 022-261-5431
FAX 022-268-9938
利府製作工場：
宮城県利府町飯土井字新中堀 53
http://www.tohatsu.co.jp/

取締役社長 / 加藤 博
資本金 / 10億円
設立 / 1959年2月
従業員数 / 1,747人(2016年3月現在)
事業内容 / 発電設備・原子燃料サイクル関連設備・電気通信設備及び各種産業用設備の調査・設計・製作・施工・販売・賃貸借・診断・検査並びに運転・保守。土木・管・建築及び塗装工事の調査並びに設計・施工 他

企業理念 / 当社は、東北電力企業グループの一員として、東北電力の電源部門設備の建設・保守・運転に対する使命を全うし電力の安定供給に寄与するとともに、一般産業分野にも事業を展開し、東北地方の発展に貢献します。



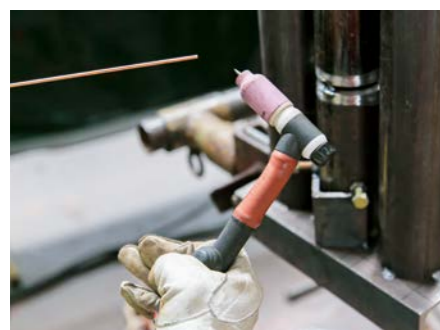
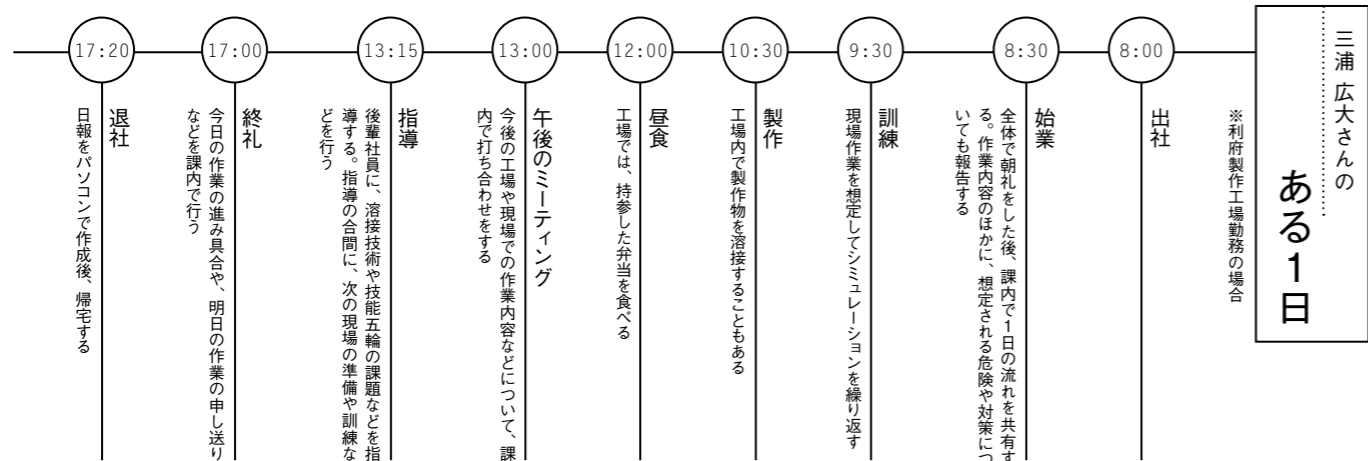
教育期間中の後輩に指導をする。三浦さんがこれまで培ってきた知識と技術を丁寧に教えていく



技能五輪出場を目指す後輩を指導する。上位入賞の夢を託し、指導にも熱が入る



始業前の点検作業。電気溶接に使われる電気設備の状態をチェックする



電気溶接の一種TIG溶接に使う、トーチ(右)と溶接棒(左)。TIG溶接では、トーチからアルゴンガスを噴射させて溶接する



上司と現場作業について打ち合わせ。作業内容や危険な場所などについて図面を見ながら確認する



溶接した部分にやすりを掛ける。溶接した管は、実際の作業と同様に検査部門でチェックを受ける

**未来のACEへ
先輩からの
アドバイス**

高校生の時、「技術に関係する教科以外の知識は、社会に出ると使う機会がないのでは」と思っていました。しかし、資格取得のために試験勉強をしていると、「高校で、ちゃんと勉強しておけばよかった」と反省することが多かったです。

工業高校で、技術の基礎を身に付けることは、もちろん大切ですが、国語や社会科などほかの教科もしっかりと学んでください。

仕事については、最初のうちは要協しないこと。私はこれまで、自分で満足していた結果が、実際は、不十分だったという経験がたくさんありました。

「経験が浅いうちは、何を取り組むにしても妥協はしない。自分で成長を止めてはいけない」

仕事に対して、常に向上心を持って向き合ってください。

上司に聞く

利府製作工場 製作・溶接課 副課長
石倉 昭悦さん

現場の第一線で働く若手のホープ 後輩の指導とのバランスを大切にしてほしい

現在、三浦君には現場の第一線で働いてもらっているところです。先輩から様々な指導を受けながら、ようやく現場のやり方に慣れてきたといったところでしょうか。

5年の教育期間でしっかりと基礎を学び、技術面において、まさに波に乗っている時期かと思えます。現場では、予期せぬ事態が付きものですが、失敗を恐れることなく、さらに経験を積んでほしいと思います。

仕事に対してまじめに向き合う姿勢をとても評価しています。ただ、まじめすぎるゆえに、工場では一つのことに見えてしまう。後輩の指導がおろそかになっているように感じる場面も見られます。

これからは、周囲の状況に目を配りながら、後輩の指導と自分の仕事のバランスを大切にしてほしいですね。

「きれいな仕上がりは、正確に溶接が行えたことを意味します。だから、少しでも理想の形に近づけるように、日々技を磨いているんです」

三浦さんは、技能五輪を目指す後輩の指導にもあたっている。かつては自分の目標だった技能五輪。現在は、自分が果たせなかった上位入賞の夢を後輩に託す。そして、指導を通じて三浦さん自身もさらなる成長を目指している。

「これからは、火力発電だけでなく、地熱発電や原子力発電など幅広い分野で活躍できるように、必要な技術や資格を手に入れていきたい。でも、大切にしたいのは、次の現場で与えられた仕事を確実に遂行することです」。三浦さんはこう話す。上げていた遮光マスクを顔の前まで下げて訓練を再開した。電気溶接の鋭い閃光が、再び辺りを灯し始めた。

しかし、現場に到着すると、想定した以上に狭い場所での作業を強いられ苦戦した。しだいに経験豊富な先輩と作業に差がつか始め、追いつこうと作業前の確認を怠り、正確な溶接ができなかった。こうして三浦さんの自信は一瞬にして打ち砕かれた。

「現場作業の難しさを思い知らされました。惨めな気持ちと悔しさが込み上げてきて、工場に戻ってから同じ作業を繰り返して復習しました」

現場で働くようになって3年目を迎えた今でも、常に新しい経験が得られるという。三浦さんは、想定外の状況に直面しても、冷静に考えて、先輩のアドバイスに耳を傾

けながら作業を進めている。焦ってケガやミスをする方が、かえって遠回りになると。かつての苦い経験が教えてくれたからだ。

「先輩より作業が遅くても、決められた期間内にすべての作業が終わってほしい」。そう思えるようになった。

後輩の独り立ちを後押し 自分自身もさらなる高みを目指す

春と秋は、大規模な発電所の定期検査が集中する。それ以外の時期も、工場などの発電設備の点検や工事が入るとい。一度現場に向かうと、2週間は自宅に戻ってこ

られないこともある。そのため、三浦さんは1年の半分を、東北6県と新潟県内の作業現場で過ごすことになる。

「家族と離れる時間は寂しい」と話す三浦さん。それでも現場に向かうと、気持ち切り替え、自分の持てる限りの知識と経験を注ぎ込み作業に挑んでいる。

溶接士には、自分が抱く理想の溶接の形があると三浦さんはい。例えば、配管の電気溶接に用いられる「裏波溶接」では、凹凸がなく、きれいな波形を描くように仕上げるのが、三浦さんの理想としている形だ。

CASE 02

仕事図鑑

高度な溶接技術を武器に 電力の安定供給を支える

溶接士
三浦 広大さん (25歳)

東北発電工業株式会社 利府製作工場 (利府町)

企業情報

古川ガス株式会社

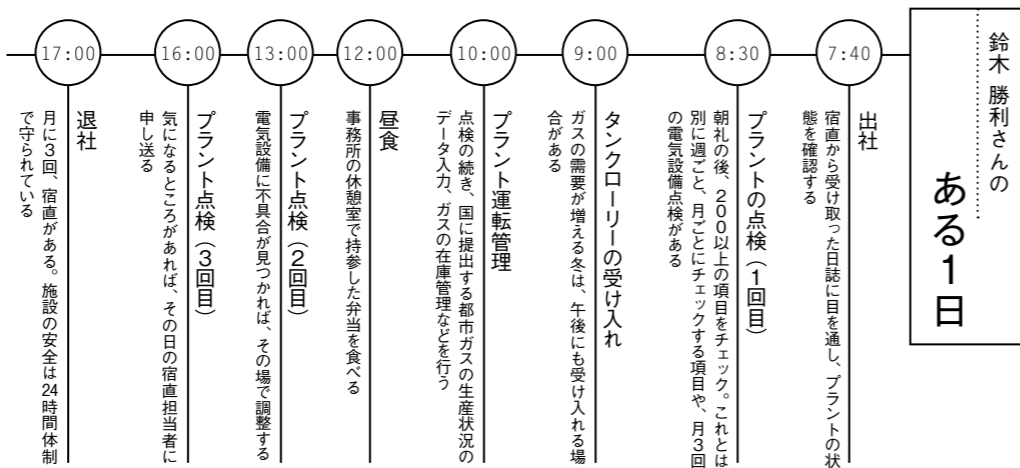
所在地 / 大崎市古川若葉町 2-14-1
 TEL 0229-23-1100
 FAX 0229-23-1102
 http://www.furukawa-gas.co.jp/



代表取締役社長 / 加藤 智治
 資本金 / 2,000 万円
 設立 / 1960 年 7 月
 従業員数 / 34 人 (2016 年 6 月現在)
 事業内容 / 都市ガスの製造・供給及び販売、簡易ガスの供給販売、LPガスの供給販売、ガス機器の販売、配管工事の設計施工
 企業理念 / 1. 私たちは年中無休、24 時間お客様の安全・安心を守ります。2. 私たちは原料費調整制度に基づき適正な価格でガスをお届けいたします。3. 私たちは CO₂ 削減に真剣に取り組みます。



LNGを気化するための装置。3基あるうち2基を交替させながら稼働している



月に1回のガスメーターの検針は、社員総出で行う。鈴木さんは約 230 件を担当する



都市ガスの製造は、鈴木さんと菅原利典さん(左)の2人が担当している。息の合った連携で、安全な都市ガス供給が守られている



プラントの点検作業。想定されるあらゆる異変も見落とさず入念に行う



未来の ACE へ
 先輩からの
 アドバイス

危険が伴う仕事では、自身の保安を第一に考えて行動します。そのためには、周囲のちょっとした変化にも気が付くことが重要です。私は、常に整理整頓を心掛けて、機械や道具に愛着を持つことを大切にしています。調子がいい時は、優しくなでてしまったり、悪い時は「頼むよお」と思わず声を掛けてしまいます。都市ガスプラントは、とてもかわいい存在です。

社会に出ると、うまくいかないと感じることが多いでしょう。そこで、最初のうちは、経験豊富な先輩たちの力を借ります。私はまず、先輩の名前を必死に覚えめました。人は自分の名前前で呼ばれるとうれしいものです。失敗して、ときに叱られることもあるかもしれませんが、先輩は、必ずフォローしてくれる頼れる存在です。

仕事は、少しずつ覚えていくもの。焦らず、ゆっくりと慣れていってください。



五感を研ぎ澄まし
 小さな異変も見逃さない

設備の隅々まで目を配り
 都市ガス製造の一部始終を管理する

午前9時。鈴木勝利さんは、都市ガスの製造プラントで、原料となるLNG（液化天然ガス）の受け入れ作業をしていた。約10トンのLNGを積んだタンクローリーが、ホースでプラントにつながれている。

「全開します」

そう言うと鈴木さんは、配管のバルブを回し、マイナス160℃のLNGを貯蔵タンクへ送り込む。すると、たちまちホースや配管から、もうもうと白煙が立ち込めた。「これは、空気が冷やされて水蒸気が凝

縮したもの。冷凍庫を開けると出る白い煙と同じです」と鈴木さんは教えてくれた。貯蔵タンクに移送されたLNGは、プラントで外気温によってガス化される。そして、圧力や熱量が一定になるように調整された後、ガス漏れを感知するための臭いがつけられる。こうして完成した都市ガスは、大崎市内の約5500軒の家庭や事業所のもとに届けられている。

鈴木さんは1日3回、プラントや周辺の設備を回り、計器の数値に異常はないか、ガスが漏れている場所がないかなどを点検している。1回の点検で確認する項目は200以上にも及ぶという。

「ガスが止まると、お客様の生活や仕事を止めてしまう。毎日チェックをしても、正常にプラントが動いているか心配で、いまだに寝付けない夜があるんです」

都市ガス製造一筋24年
 危険と向き合い、地道に課題を解決

鈴木さんは、1992年に古川ガス株式会社に入社して以来、一貫して都市ガス製造に携わってきた。工業高校の電気科で学んだ鈴木さんは、入社当時、専門外の現場に戸惑ったという。

しかし、先輩から製造法を学ぶうちに、プラントに電気で動く設備がたくさんあることを知った。「それなら、自分の電気知識が生かせる」。不安が晴れた鈴木さんは、経験を重ねながら、高圧ガス製造保安責任者や乙種ガス主任技術者など、都市ガス製造に必要な資格を取得していった。

鈴木さんが担当するプラントは、2004



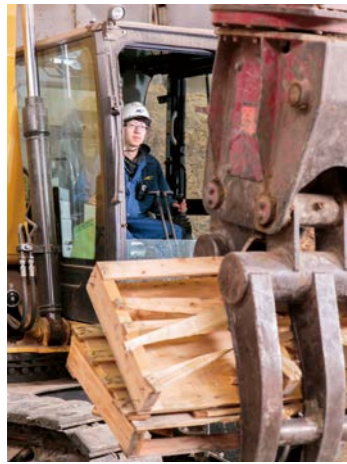
- 無線機で管理室からの指示に耳を傾けながら、配管の開閉バルブの状態を調整する鈴木勝利さん
- LNGが通るホース周辺の空気が冷やされると、水蒸気が凝縮して白煙が発生する。雨の日など湿度が高い日は、辺りが真っ白になるという

仕事 03
 CASE 03

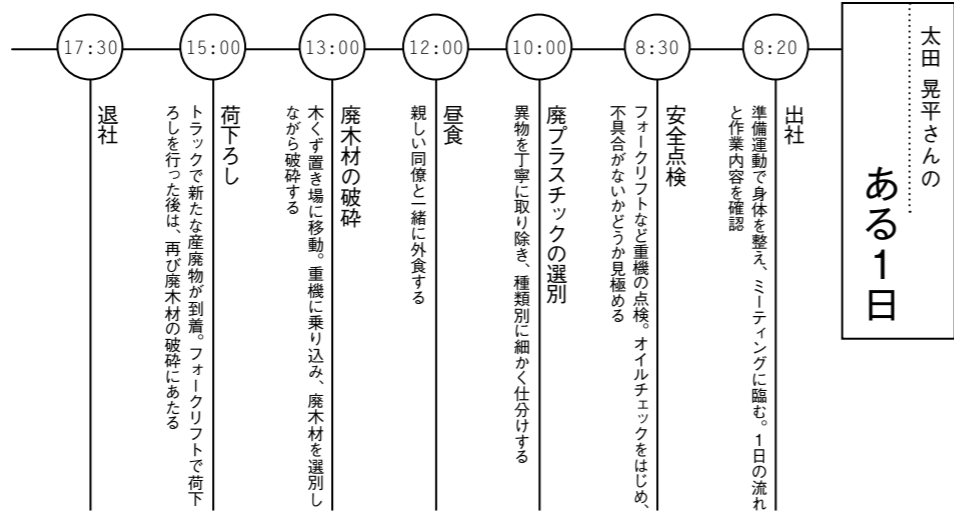


まちの営みに火を灯す
 都市ガス製造の安全を守る

製造 鈴木勝利さん (44歳)
 古川ガス株式会社 (大崎市)



重機を用いて建築現場や解体現場から排出された木材を破碎。太田さんの活躍が光る現場だ



組み合わせ自在で誰でも気軽にガーデニングなどを楽しめる自社製品「キューブブロック」。原料はもちろん、太田さんたちが選別・破碎した廃プラスチックだ



廃プラスチックは手作業で選別。硬さや材質などができる限り細かく分別することで、質の高いリサイクルが実現できるという



部署ごとにメンバー全員が集まり、毎朝行われるミーティング。安全で効率的な作業進行に欠かせない日課となっている



豊富な経験と確かな技術で
産廃リサイクルの最前線に挑む

仕事 図鑑 CASE 04

限りある資源の循環を構築し 豊かな未来につなげる

廃棄物リサイクル
太田 晃平さん (21歳)
株式会社ジェーエーシー 蔵王資源リサイクル工場 (蔵王町)

多種多様な廃棄物を選別・破碎して
有用な資源に再生させる

蔵王の山並みを望む広々とした工場の中で、太田晃平さんは大型重機を縦横無尽に操る。見上げるほどに積まれた廃木材の一つをアームの先で挟んだ瞬間、パチンという音とともに破片がはじけ飛んだ。

「危ないから離れて!」
鋭い声が響き一瞬の緊張が走ったが、ともに働く仲間の安全を確認すると、太田さんはまた生き生きと作業を始めた。

株式会社ジェーエーシーの蔵王資源リサイクル工場は、産業活動で排出されたプラスチックや木材などの回収から再資源化までを一貫して行う。近年は、再生原料を培地として、野菜やキノコを栽培するなど、自然と調和したリサイクルシステムを構築



- 社内でも数少ない重機免許を持つ太田晃平さん。死角が多いため、操作中は常に細心の注意を払わなければならない
- 搬出物の積み込み作業。フォークリフトの免許取得も会社がサポートし、太田さんは入社半年ほどで取得した
- 廃棄物で作った燃料をバイオマスボイラーで熱エネルギーにリサイクル。その熱を利用して栽培された無農薬野菜やキノコ類は、工場隣に4月にオープンした「JAC's Village」レストランの料理を彩っている

重要な仕事と考え頑張っています」

地域や社会に貢献するため
「ごみ」を通して世の中を学び、技を磨く

太田さんが環境・リサイクル分野に関心を持ったのは、東日本大震災がきっかけだった。「大量に出たがれきをどう処分するのか、関心がありました。地元の工場でがれき処理を行っていることを知り、入社を決意したんです」

入社して1年ほどの間は、震災がれきが頻繁に搬入されてきた。泥にまみれたプラスチックや木材を仕分けしていると、時折ランドセルなど被災した人々の生活が垣間見えるものも見つかり、太田さんは胸を痛めたという。

「被災地の一日も早い復旧・復興を願うとともに、自分も仕事を通じて貢献できたいな」と思いました」

1年前にフォークリフトなど重機の免許を取得した太田さんは、仕事の幅が広がったことで、一層やりがいを感じるようになった。その後も、地道にキャリアを重ね、新入社員の指導も行うなど活躍のフィールドを広げているが、現状に満足してはいない。

「仕事をする中で、いまだに上司に頼らざるを得ないことがあります。もっといろいろな経験を積み、自分で判断して行動できるような努力していきたいです」と話す太田さん。その表情は、意欲と向上心に満ちあふれていた。



先輩からの
アドバイスを
今後のACEへ

新人の時期は何もかもが初めてで、分からないのが当たり前、ミスをして当たり前です。しかし、責められるのを恐れて報告や相談を怠っていると、いつまでも次のステップには進めません。

わからないことはその都度先輩や同僚に聞いて解決する。ミスをしたら正直に話し、再発防止に努める。そんな地道な努力が人間関係を円滑にし、自分のスキルアップにもつながると思います。

また、工場には重機をはじめ様々な機械があり、それらを用いる作業は危険を伴います。そのため、時には厳しい態度をとることもありすが、それは一緒に働く仲間を危険から守りたいという思いの表れ。今後の活躍を期待しているからこそ「愛の鞭」だと理解し、自信を持って仕事に向き合ってください。

企業情報

株式会社ジェーエーシー (JAC)

所在地 / 本社：石巻市蛇田字新坪寺 81-3
TEL 0225-96-9662 FAX 0225-93-2565
蔵王資源リサイクル工場：
刈田郡蔵王町小村崎大字山崎 14-1
http://www.jac-miyagi.com/

代表取締役 / 真野 孝仁
資本金 / 3,000万円
設立 / 1995年4月
従業員数 / 112人 (2016年5月現在)
事業内容 / 産業廃棄物の中間処理受入と再生骨材の販売、産業廃棄物・一般廃棄物の再生資源化、各種解体・土木・建築工事請負、工事現場内での破碎処理請負 他
企業理念 / 循環型社会の構築とリサイクルの6次化で美しい環境づくりへの取組みを絶やさないこと。

